

「土から体へ」

薬草・漢方薬の長い旅

私は漢方医学を専門として、去年も引き続き荒井正言知事の下で結成された「東アジアの未来を考える委員」の末席に加えていた。奈良県との縁を移めさせていた。奈良県との縁は、昨年の平城京遷都300年の委員としてお手伝いをさせていただいた。

たことがきっかけで、本年も引き続き荒井正言知事の下で結成された「東アジアの未来を考える委員」の末席に加えていた。

漢方は中国のものと思われている方も多いかもしれないが、わが国に伝来してから1500年以上の時を経て日本化したのが、今の日本の漢方である。正倉院には漢方の原料である生薬が多数納められており、

(3章)

奈良県における生薬栽培復活への道筋

慶應義塾大学医学部漢方医学センター

渡辺賢治

1250年の時を超えて現在とつながっている。これに関しては平城遷都1300年記念出版「NARASIA」という本に書かせていただいた。

国内では、今や漢方薬は医師の8割以上が日常診療に用いており、医療

現場では欠かせない存在となっている。一方で、

相場マネーも加わり、生薬価格が近年順に高騰している。

奈良県には医療用漢方製剤とは別に、生薬製剤の配置薬の制度も古い歴史がある。セルフメディケーションとして、高騰する医療費の抑制につながることも期待されるが、やはり原材料費の高騰は大きな打撃である。

これまで1500年続いてきた日本の漢方が存続の危機に直面している。現在、原料である生薬のわが国の自給率は12%であり、8割超を中国からの輸入に依存している。ところがグローバル化が進む中、ローカルで

わが国では、医療用漢方薬の場合、原材料費が高騰しているにもかかわらず、国の決める薬価は工業製品同様に価格がどんと下がっているため、医療用漢方薬の維持が困難となっている。

こうした現状を踏まえ、シンポジウムでは持続可能な漢方医療のあり方が討論された。奈良県の生薬栽培の歴史は長く、大和当帰・大和芍薬などのブランドを持ってきた。こうした奈良の持つ強みを生かし、奈良から日本の生薬栽培の復活をすするために、以下の結論でシンポジウムを閉じた。

①奈良の持つ強み、魅力というものを最大限に引き出し、この長い歴史、生薬の伝統というこ

とに誇りを持つこと②伝統は、廃れると復活するのに本当に時間がかかる。奈良県にノウハウが残っているうちに、後継者の育成というものをきちんとしてやること③中小農家で苗から栽培、収穫、加工までの全てをやるのは限

①奈良の持つ強み、魅力というものを最大限に引き出し、この長い歴史、生薬の伝統というこ

とに誇りを持つこと②伝統は、廃れると復活するのに本当に時間がかかる。奈良県にノウハウが残っているうちに、後継者の育成というものをきちんとしてやること③中小農家で苗から栽培、収穫、加工までの全てをやるのは限



熱い討論が交わされたパネルディスカッション

とに誇りを持つこと②伝統は、廃れると復活するのに本当に時間がかかる。奈良県にノウハウが残っているうちに、後継者の育成というものをきちんとしてやること③中小農家で苗から栽培、収穫、加工までの全てをやるのは限